青い瞳のステラ

西暦二〇〇七年地球。

地球と言っても『ちきゅう』と読んではいけない。地球は『ちたま』と呼ばれる星で、地球が浮いている銀河系の双子銀河にある双子星である。

第一章　サファイア

冬、もう陽も落ちて暗くなった街。
通りを行き交う人達とネオンに紛れて、一人の少女がバイオリンケースを持って歩いていた。
「お腹も空いたし、早く帰って晩ご飯食べよう……」
そう呟いて、彼女は足早に街を通り抜けて行く。
彼女の名前は泉岳寺ステラ。
この日は毎年通っている石の即売会、鉱物ショーに行った帰りだった。

「ただいまー」
ステラが家に帰り、自分の部屋に戻るなり、彼女は持っていたバイオリンケースを開く。
すると、中に入っているのはバイオリンなどでは無かった。
それは、夥しい数の青い石。
この石達は、ステラが集めた石のコレクションの一部。
ステラは夕食を食べることも忘れて石に見入る。
「今年は結構良いのが買えたな〜。

サファイアの原石も良いのが有ったし」
　そう言って取り出したのは細長い八面体の青い石、サファイアの原石だ。
　ふと、ステラの目の端に、何か動いている物が映った。
それはバイオリンケースの中に見えた気がするので、ステラはバイオリンケースに視線を戻す。
そして、見てしまった。
「初めましてご主人様。
これから宜しくケコ」
　そう言ってステラの方を見ているのは、背中にびっしりと青い石を敷き詰めた、メタリックなカエル。
思わず、バイオリンケースの蓋を閉める。
すると中から抗議の声が。
「ご主人様〜、何で閉めるケコか？」
　これは幻聴でも幻覚でもない。
そう思ったステラはそろりそろりと再びバイオリンケースの蓋を開ける。
すると、其処にはやっぱり青い石に紛れて、青いカエルが鎮座(ちんざ)してい

る。
　見つめ合う事暫く。先に口を開いたのはステラだった。
「ご主人様って私の事？
あんた一体何者なのよ」
　その言葉に、青いカエルはしれっとした顔で応える。
「あたしは宝石ガエル。
何時もご飯くれるからご主人様ケコよ」
「私が何時あんたにご飯をあげたよ？」
「さざれの石とか落ちてるのをペロリしてるケコよ」
　まさかその程度で餌付けされてしまうとは。
ステラは額に手を当てる。
その様子をみたカエルが、心配そうにステラに言う。
「ご主人様、何処か具合が悪いケコか？」
「いや、そう言う訳じゃないから。
って言うか、私があんたのご主人様って事は、私はあんたにご飯を与えなきゃいけないって事なのね？」
「そう言う事ケコよ。
あ、でも、タダ飯喰らいとか思わないで欲しいケコよ。

ご主人様が石を買う時にアドバイスしてあげる――
　期待の混じった眼差しで見つめられ、ステラは溜息をつく。
正直な所、自分が石マニアだという自覚は有るのだが、鑑定眼にはいまいち自信がない。
だから、これだけ宝石を背中に敷き詰めているカエルだ。
きっと石を買う時のアドバイスは的確な物になるだろう。
そして、ステラは決心する。
このカエルのご主人様になろうと。
「ＯＫ、わかった。あんたのご主人様になるよ。
でさ、名前がないとあんたの事を呼ぶ時困るから、名前を付けようと思うんだけど」
　ステラの言葉に、カエルは飛び跳ねて喜ぶ。
「お名前？
あたしお名前付けて貰うの初めてケコよ。
どんなお名前？」
　ステラはじっとカエルの背中を見つめる。
そして、一回頷くとカエルにこう言った。
「あんたの背中についてる石、サファイアが多いから、あんたの名前『サ

フォー』で良い？」
　そう言われて益々喜ぶカエル、サフォー。
「ステキ！
あたしは今日からサフォーケコよ」
　ここまで喜ばれると、名前を付けたステラとしても悪い気はしない。
こうしてステラとサフォーの生活がはじまったのだった。

　ステラはまだ高校二年生。なので当然学校に通っている。
サフォーのご主人様になると決めた次の日、学校に行こうとしたらサフォーがこんな事を言いだした。
「あたしも学校行きたいケコ！」
　そんなサフォーにステラが言う。
「行きたいって言ってもさ、こんな冬まっただ中なのに、カエルのあんたが一緒に着いて来て、通学中大丈夫？」
「大丈夫ケコよ。
宝石ガエルは外気の感覚を切る事が出来るのね？
それであたし達は冬でもアクティヴ」

そんな物なのだろうか。
少々心配な気はするが、早く学校に向かわないと遅刻してしまう。
ステラは頭にサフォーを乗せたまま、自転車に跨った。

学校に着いて。
明らかにおかしい物を頭に乗せているのに、誰も何も言ってこない。
どう言う事だろう。
ステラがそう不思議に思っていると、女子生徒が声を掛けてきた。
「おはようステラ」
「あ、おはよう匠」
匠というのはステラのクラスメイトで友人。
その匠がふと、視線を上にずらしてステラに言った。
「所でさぁ、その頭に着いてるカエル何？
新作のジュエリーか何か？」
なんだ、やっぱり不思議な物何じゃないか。
そう改めて確認したステラは、匠に簡単な説明をする。
「なんか宝石ガエルとか言うカエルらしいよ。
名前はサフォー。

色々あって私がご主人様って事になってる」
　それを聞いた匠はいたく驚い顔をしてステラに言う。
「宝石ガエルって事はスピリチュアルな存在じゃない！
あちゃー、また区別つかないで訊いちゃった」
「え、そうなの？」
　実は、匠もステラも霊媒体質（れいばいたいしつ）で、本来なら見えないはずの物が見えてしまう事が多々ある。
しかし、サフォーがスピリチュアルな存在なのなら、家を出る前に言っていた『外気の感覚を切る事が出来る』と言う下りも納得できる。
そもそも、よく考えたらリアルのカエルがメタリックだったり、背中に石を敷き詰めていたりとかする筈がない。
「ご主人様気づいて無かったの？ケコォ～」
　呆れた様に言うサフォー。
「すいませんね、私は其処まで頭が回る子じゃないんで」
　少し拗ねた様に言ってから、ステラは匠と一緒に教室に向かった。

第二章　アイオライト

サフォーのご主人様になったことを受けて、ステラは学校の帰りにとある店に寄った。

其処は『日本アイボリーセンター』と言う石の問屋。

ステラの住む国、大日本帝國では近年ビーズアクセサリーが流行中で、それを受けて天然石のビーズなども脚光を浴びている。

日本アイボリーセンターは、ビーズアクセサリーが流行る何十年も前から天然石のビーズと象牙を扱っている古参の店。

とりわけ淡水パールが安いのと、さざれの石の種類が多いので、ステラはバイトが始まる前に此処に足を運ぶことが多い。

今回此処に足を運んだのは、サフォーのご飯にする為のさざれを買う為だ。

早速店内の窓際に下げられているさざれを物色するステラ。

「……どれが良いかね……」

難しい顔でさざれを眺めるステラに、サフォーがウキウキした声で言う。

「ご主人様、アイオライト何てどう？

あたし青い石が大好きケコよ」
　それを聞いたステラが渋い顔をする。
「アイオライト？
それ、さざれでも千円以上するんだけど」
「でも、思い当たって青い石のさざれって、アイオライト位しか無いケコよ？」
「まぁ、そうだけどさ。
しょうがない、アイオライトにするか」
　サフォーの言葉に渋々アイオライトのさざれを手にするステラ。
それをレジに持っていって会計をする。
「すいません、これお願いします」
「有り難うございます。千二百円ですね」
　正直、日々貯蓄に気を使っているステラとしては、この出費は痛手だ。
けれども、袋に入れられたアイオライトを見て喜び踊っているサフォーを見て、まぁ、これも仕方がないかなと自分を納得させた。

　そして足早に向かうバイト先。

ステラがバイトしているのは駅ビルに入っているパワーストーンのお店。
その店では既に出来上がっているアクセサリーの他にも、石のビーズを一珠(ひとたま)ずつ客に選んで貰い、ブレスレットにして売っている。
正直な所、この店で扱っている石は良い物は多いけれど割高だと、ステラは思っている。
浅草橋などに行けば一連(いちれん)で約四十玉千円前後物のが、平気で一珠四十円から六十円する。
レアで品質の良い物、しかも一連などと膨大な数は要らないと言う物だったら、一珠売りの方が手軽では有るのだろうが。
「……やっぱタンザナイト八ミリ玉七千円超えってのはちょっと高い気がするんだよなぁ……」
店での日課、暇な時の石磨きをしながら。ステラがぽつりと呟く。
そんな中、ふと気が付くとサフォーの姿が見えない。
何処に行ったのだろう。
思わず手に持っていた石を台に敷かれたタオルの上に置いて、周りを見渡す。
すると、サフォーは階段状に置かれた石の丸玉が入ったケースの上を

ぬめりぬめりと移動していた。
これはもしかして。ステラがそう思った瞬間、サフォーがあんぐりと口を開けて石に向けた。
「待てコラ」
「ケゴッ！ご主人様何するケコ！」
　じたばたするサフォーを背中から鷲掴みにし、石の棚から持ち上げてステラが言う。
「店の売り物食べんじゃないよ」
　ギリギリとサフォーの背中を握りしめると、手の中から悲しそうな声が聞こえてきた。
「だって、お腹すいたケコよ。
お腹がすくと悲しいケコよ？」
「それは解るけど、無尽蔵に喰われたら棚卸しの時に苦労すんのは私なんだかんな？」
「ケコォ～……」
　ステラに小声で恫喝されたサフォーは、手足を引っ込めて店の物は食べないという意思表示をする。
それでもステラは安心出来なかったので、その日のバイトが終わるま

で、サフォーを頭の上から動かさなかったのだった。

そして無事にその日のバイトも終わり、ステラが夕食を食べ終わった後に、ようやくサフォーもご飯にありつけた。
本日のご飯はバイト前に買ってきたアイオライトだ。
「で、どんくらい食べる？」
「全部！」
欲張った発言の後にご主人様チョップを入れられるサフォー。
一連千二百円だから、一日辺りのご飯は何センチ分とステラが決め、サフォーは大人しくそれに従う。
ビーズ用のトレイの上に載せられたアイオライトをちびちびと、なめりなめりと嘗めるサフォーを見てステラは意外そうな顔をする。
「なんか食いしん坊っぽいから一気に食べるかと思ったけど、そうでも無いんだ」
バイト先での一件を思い出しながらそう言うと、サフォーは拗ねた口調で答える。
「だって、お店の石食べちゃ駄目なんでしょ？
毎日のご飯はこれだけなんでしょ？

一度に食べたらひもじくなるだけケコ……」
だんだん涙声になっている気がするその言葉に、流石にステラもケチり過ぎたかと一瞬思うが、そもそもステラ自体がそんなに裕福な訳では無いので、先ほどサフォーに言い聞かせたように一日のご飯はこれが限界だ。
気まずそうなステラの様子に気づいたのか、サフォーがはっとして言う。
「で、でも、前は落ちてるのをちょっとしか食べられなかったから、これでもご馳走ケコよ！
ご主人様ありがとうケコ！」
食い意地は張っているけれど、ちゃんと気遣いも出来るサフォーの姿を見て、ステラは思わず笑みを零す。
そしてそのまま、暫くサフォーがアイオライトを嘗める様を眺めていたのだった。

第三章　フローライト

ステラの元にサフォーが来て暫く、ステラもサフォーの居る生活に慣れてきた。
そろそろサフォーのご飯用に買ったアイオライトが減ってきたので、アイボリーセンターでさざれを物色する。
「う～ん、どれが良いかね。
またアイオライトって言うのも食べ飽きちゃうでしょ？」
「あたしは別に構わないんだけど、他のも気になるケコよ」
小声で話しながら物色していると、ふとサフォーが嬉しそうな声を上げた。
「ご主人様、これこれ！」
何かと思って見てみると、青緑色のフローライトがぶら下がっている。
「ああ、そういえばブルーフローライトの流通量が一気に増えてるらしいよね、最近」
そう呟いてステラがブルーフローライトのさざれを手に取ると、なかなかお財布に優しい値段をしている。

「これが食べたいの？」
　ステラがサフォーにそう訊ねると、サフォーは陳列棚の上に飛び乗って踊り出す。
「食べたいケコよ！
今までブルーフローライトはなかなか食べらんなかったから、じっくり味わいたいケコ～」
　ぴちぴちと踊るサフォーを見て、ステラもこの値段なら二連くらい買っても大丈夫だなと、ブルーフローライトの束をレジへと持っていった。

「さて、今日はバイトも休みだし、他の石屋さんも見る？」
　アイボリーセンターから出たステラは頭の上でステップを踏むサフォーに声を掛ける。
すると、頭の上から言葉にならない歓声が聞こえてきたのでそのまま他の石屋の有る方向へと足を向けた。
　暫く歩くと、ビーズやアクセサリーパーツを扱う店が姿を見せ始める。
「ケコ～、あたし、綺麗な青いガラスなんかも好きケコよ」

「へー、そうなんだ。
プラビーズとかアクリルはどうなの？」
「石油系はジャンクフードケコね。
でも、大切に大切にされて時間をたっぷり過ごした石油製品は、しっとりとして、それでいてまろやかな味がするケコよ」
「ううむ、人間の喰ってる食品とあんま感覚変わらないのね」
「ま、食べ物だからね」
　そんな話をしていると、突然ステラの携帯が鳴り始めた。
誰かと思いながら着信を見ると、匠から。
「もしもし。どしたん？」
『ステラ！今どこに居る？』
「え？浅草橋」
『丁度良かった、今すぐ馬喰町まで来れる？
強盗犯と警察でカーチェイスやってんのよ』
「プゲラッ。
了解、今から向かうわ」
　通話を切り、携帯電話を鞄にしまったステラはそそくさと人目に付かない物陰に隠れる。

「ご主人様、どうしたケコか？」
「ちょっと片付けないといけない厄介ごとが入ってきたのよ」
「ケコ？」
　訳がわからないと言った顔をするサフォーをよそに、ステラは普段人目に付かないように首から下げている、青い石のペンダントに手を当てながら構えて言う。
「変身、ダイヤキング！」
「ご主人様、なんか電波……
ケコォ！」
　突然の事にサフォーがツッコもうとした途端、かけ声の一瞬後にステラの体が光に包まれ、姿が変わる。
フリルの付いたハイネックのレオタードに、先端が二股に分かれた長いとんがり帽子。
そして手にはトランプのダイヤマークを模ったモチーフが付いた杖が握られていた。
「ごごごごご、ご主人様、どういうことケコか？」
「今は説明してられん。
取りあえず馬喰町に向かうよ！」

戸惑うサフォーを頭に乗せたまま、ステラは驚異的なジャンプ力でビルの上へと飛び乗り、そのままビルの屋上を跳び回りながら匠が居るであろう方向を目指した。

聞こえてくるサイレン。

匠から聞いたとおりなら、この付近でカーチェイスが展開されている筈。

そして見えてきた。猛スピードで走ってくる一台の車が。

「止まれオラァ！」

ステラがそう叫んで車の方へと投げつけたのは、先ほど買ったばかりのフローライトのさざれ数粒。

一見たいした効力は無いように思えるが、車にぶつかったその瞬間、目が痛くなる程のまばゆい光を放った。

激しく鳴り渡るブレーキ音。

急ブレーキを掛けられた為に横向きになって突っ込んでくる車を、ステラは思いきり杖でぶん殴る。

「大人しくしやがれこのクズが！」

なかなか止まらない車を何度か杖で殴り続けていると、車の後方

から聞き覚えの有る声が聞こえてきた。
咄嗟にステラは車から距離を取る。
「マイナーアルカナ、シャッフル！
スォードナイト！」
　その声の直後、車の周りに大きな剣が降り注いだ。
大きな剣に阻まれた車はようやく動きを止め、程なくして警察が追いついた。
警察と同時にやってきた、ステラと同じようなとんがり帽子を被っている少女に声を掛ける。
「スペードペイジ、お疲れ」
「わーい、援助ありがとね、ダイヤキング」
　警察が周りでわちゃわちゃやっている手前、お互い本名で呼び合う事が出来ないのだが、ステラが『スペードペイジ』と呼んでいる少女は友人の匠だ。
　犯人を御用した警察官達が二人に礼を言う。
「スペードペイジさん、ダイヤキングさん、ご協力有り難うございます！」
「市民の平和を守るのは、我々魔法少女の勤めですから」

「また事件の時には駆けつけます！
それでは、スペードペイジ・フォー・ジャスティス！」
「あっ……
だ、ダイヤキング・フォー・ジャスティス！」
　決め台詞を残しその場を立ち去る二人。
その場から十分に距離を取り、人目に付かない路地で二人は変身を解く。
「匠……あの恥ずかしい決め台詞何とかなんないの……」
「え？かっこいいじゃん」
「……恥ずかしい……」
　二人がそんな話をしていると、ステラの頭の上からサフォーがおどおどと声を掛けてきた。
「ご主人様、今の一体何だったケコか？
魔法少女ってどういうことケコか？」
　それを見た匠が、声を上げてサフォーを撫でる。
「サフォーも居たんだ！
ステラ、この子には説明しちゃって良いの？」
「上がなんて言うかは解んないけど、まあ良いんじゃ無い？

この子自体スピリチュアルだし、もう正体ばれてるし」
「そっか、それもそうだね」
　ステラの言葉に、匠はざっくりと説明を始める。
ステラと匠は、『鏡の樹の魔女』に力を授けられた四人組の魔法少女の中の二人で有る。
いつまで経っても悪が無くならないこの世界を憂慮した『鏡の樹の魔女』が、様々な場所で様々な人物に、悪を倒す為の力を授けているという。
　その説明を、サフォーはポカーンとしながら聞いている。
「ケ……ケコォ……
なんか不思議な話ケコね」
「いや、不思議な存在のあんたに言われたくない」
　自分の事を棚に上げているサフォーにステラがツッコむと、突然サフォーが暴れ出した。
「そう言えばご主人様！あたしのごはん投げたでしょ！
あたしのごはん、あたしのごはんんん！」
「しょうがないでしょ、緊急事態だったんだから！」
　ステラとサフォーの様子を、匠は苦笑いしながら眺める。

「宝石ガエル飼うのも大変なのねー」
取りあえず。と声を掛けてきた匠に誘われ、ステラとサフォーはビーズ屋さんを回る事にした。